

学生が希望ゼミナールを決める際の 情報源と判断基準に関する調査

村 田 務

1、はじめに

本学保育科において、ゼミナールは、卒業及び幼稚園教諭免許、保母（保育士）資格に必要な教科目である。また、ゼミナールでは、1年半にわたって、同じ教員の指導・助言を受けながら、同じ仲間とともに学習や研究、学生生活などをおこなう（詳細については後述）。学生にとって、どのゼミナールを受講するようになるかは重要事項となる。

ゼミナールの配属は、学生の希望（興味や関心など）をもとに教員が決定している。しかし、配属にあたって、これまでに、いくつかの問題点が指摘されてきた。まず、1つのゼミナール当たりの許容人数があり、第一希望通りに配属されないこともある。また、入学してから間もない時期に、学習したり研究する領域について決定することに困難さを感じる学生がいる（この時期の殆どの学生は、保育に関するどの領域についても興味や関心をもっている。特定の領域を絞り込むのに苦労している）。更に、各ゼミナールの活動内容や教員の研究領域及び「人柄（相性）」についても十分に理解しているとは言えないのが現状である。

そこで、本調査では、効果的なゼミナール配属を計画し実施するために以下の点について明らかにする。

- 1) 学生は、各ゼミナールの活動内容を把握するために、どのような情報源や機会を参考とするのか。
- 2) 学生は、希望するゼミナールを決定する際に、どのような視点や「判断基準」でおこなうのか。
- 3) ゼミナールの活動状況を理解するための1つの機会として、合宿を伴うオリエンテーション・セミナーにおいて、「希望通り」のプレゼミ体験を実施しているが、この「希望通り」は、どのくらい有効であるのか。

2、ゼミナールの活動内容と配属までの流れ

1) ゼミナールの活動内容・位置づけ

保育科におけるゼミナールは、1ゼミ当たり約12名の学生と1名の担当教員で構成される。1年次前期終了近くに決定され、ゼミ活動は、後期より半年のゼミナールⅠと2年次全期のゼミナールⅡ、合わせて1年半にわたり連続して、同じゼミで行われる。ゼミナールの活動内容及び位置づけは、およそ次の4点である（表1）。

表1 ゼミナールの位置づけ

学 生	教 員
①小集団学習・研究活動	①ゼミナール・演習指導
②教育・保育実習	②教育・保育実習の事前事後の指導
③進路相談	③進路指導及び相談（人物調書、進学推薦書等の作成も含む）
④学生交流・学生生活	④生活指導及び相談

① 小集団学習・研究活動

担当教員の指導や助言をもとに、小集団、演習形式によって学習・研究活動をおこなう。ゼミⅠでは、教員が用意した課題を解決しながら、保育に関する学び方や研究の仕方について学習していく。

ゼミⅡでは、教員が学習・研究内容について一定の方向性を提示されるものの、具体的な課題（ゼミ研究のテーマ）については、学生自らが設定して、さまざまな活動を通して解決（研究）していく。

② 教育実習・保育実習

教員は、教育実習や保育実習の一環として、実習の前後に必要な指導をする。具体的には、実習前と実習後に「実習日誌」を点検したり、実習後に実施されるゼミ単位での「実習反省会」において、必要な指導や助言をする。時には、実習前の不安や心配事について相談を受けたり、実習中に起きた諸問題の解決に当たることもある。

③ 進路相談

学生は、進路について、特設の面接や日頃の「会話」を通してゼミ教員に相談する。ゼミ教員は、就職課と連携をとりながら、教育的観点から個別的な問題について適切に助言する。また、就職試験に「人物調書」が必要な場合には作成したり、進学を推薦できる学生に対して「推薦書」を書く。

④ 学生交流・学生生活

ゼミナールの仲間は、授業日以外にも集まり活動することがある。食事会やスポーツなど学生生活に潤いを与える役割をもつ。学習・研究とも関わるが、学園祭にゼミ単位で参加して、研究発表をしたり、「出店」を開くこともある。こうした活動の中で、仲間づくりや社会性を培っている。

なお、本来のゼミナールの位置づけは、①の小集団学習・研究活動のみであるが、全教員による実習指導体制と指導効果という観点から、ゼミナール構成単位で②の教育実習・保育実習の指導をおこなっている。また、③の進路相談や④学生生活の指導はクラス担任の業務であるが、教育的効果と現実性ということから、学生の状況を把握しているゼミ担当教員が分担している。

2) ゼミナール配属までの流れ

ゼミナール配属までの流れは、およそ5つの「イベント」からなる（表2、資料1及び資料2）。1998年度の配属状況を示す。

表2 ゼミナール配属の流れ

時期	機会	内容
4月	入学オリエンテーション	①配属方法と日程の概要説明
5月	八王子セミナー日	②「オリゼミ概要」(ゼミ内容の説明)の配布 ③体験ゼミの開催
6月	ゼミ説明会	④「ゼミ案内」(ゼミ活動+教師の紹介)の配布 ⑤各教員からのゼミの説明
6月	研究室訪問	⑥教員への質問と自己アピール
7月	配属ゼミの希望と決定	⑦第一次希望⇒決定、未決定(第二次希望へ) 第二次希望⇒決定、未決定(調整へ) 希望の調整⇒決定

資料1 1998年度 ゼミナールI配属の方法について(教員用)

- 1、学生へのゼミ配属についての情報の提供
 - 1) ゼミ説明会で「ゼミ配属の方法」について説明する。
 - 2) 「ゼミ配属の方法」について記述した冊子「保育科ゼミナール案内」を配布する。
 - 3) 「ゼミナール関連掲示板」に「ゼミ配属の方法」を掲示する。
- 2、学生へのゼミ情報の提供
 - 0) 八王子オリゼミで「ゼミナール体験」を開催する。
 - 1) ゼミ説明会を開催する。・・・・・・6月2日(火)
 - 2) 「保育科ゼミナール案内」を配布する。
 - 3) 研究室訪問の期間を設ける。・・・・・・6月3日～6日 第一期
6月15日～20日 第二期
6月25日～27日 第三期(未決定者のみ)
 - 4) 「ゼミナール関連掲示板」に各ゼミ毎に活動状況を掲示する。
 - 5) 各ゼミ毎に「ゼミ説明会」の開催する。
- 3、ゼミ配属の方法について
 - 1) 定員は、原則として12名とする。増減を希望するゼミは、「ゼミ説明会」までの教員会議に提案し、教員会議の了承を受ける。
 - 2) 希望ゼミが偏り、ゼミ希望調査を2回にわたって実施することも考える。2回目の希望は、1回目で決定されなかった学生に対して行われる。
 - 3) 第1回目で定員(12名)に満たないゼミは、希望した学生を全員ゼミ学生として決定する。そして、不足する人数をゼミ係へ報告し再度募集する。
第1回目で定員(12名)を越えたゼミは、応募した学生を考査して、ゼミ学生とする学生(決定者)と、しない学生(未決定者)をゼミ係に報告する。
 - 4) ゼミ係は、学生に対して、「ゼミ配属の決定学生」と「再募集ゼミ」を知らせる。
 - 5) 第2回目でも、定員(12名)に満たないゼミは、希望した学生を全員ゼミ学生として決定する。そして、まだ、不足する人数をゼミ係へ報告する(再々度募集)。
第2回目で定員(12名)を越えたゼミは、応募した学生を考査して、ゼミ学生とする学生(決定者)と、しない学生(未決定者)をゼミ係に報告する。
 - 6) ゼミ係は、第2回目のゼミ希望でも決定しなかった学生を、後日7月6日(月)に集合させて、ゼミ係の指導のもとに、ゼミ希望を調整し配属を決定する。

4、ゼミナール配属に当たっての留意事項

- 1) 「内定」を出さない。
- 2) 「ゼミ案内」に記載される「教員紹介」と「ゼミナールシラバス」の原稿を提出する。
 - ・ 期限：6月26日 17:00 教務課まで
 - ・ 印刷原稿は、そのまま印刷される（オフセット印刷）。
 - ・ 「シラバス」ではゼミナールだけでなく、ゼミナール「の内容についても触れる。
 - ・ 教員紹介の右上の空欄には、「教員の顔」が入る。未記入の場合には似顔絵が入る。
- 3) 研究室のドアに研究室訪問期間中の「在室予定表」を掲示しておく。
- 4) 「ゼミ説明会」での説明時間を、3分45秒以内とする。時刻は別紙の通り。
- 5) 考査報告（決定者と未決定者）の締め切り期限を厳守する。
 - ・ 第一次：6月25日（木）12:00 教務課まで
 - ・ 第二次：7月 2日（木）12:00 教務課まで

資料2 1998年度 保育科ゼミナールⅠ 配属決定までの日程

日程	内 容
5/14木	配属方法の検討(学科会)
15金	「教員紹介」「ゼミ案内」の原稿依頼↑
16土	
17日	
18月	
19火	1年生オリゼミ
20水	1年生オリゼミ
21木	1年生オリゼミ
22金	
23土	
24日	
25月	
26火	「教員紹介」「ゼミ案内」の原稿締切
27水	↑
28木	「教員紹介」「ゼミ案内」の製本(事務)
29金	↓
30土	
31日	
6/1月	「保育科ゼミナール案内」の配布
2火	ゼミ説明会 13:00~14:30 B43
3水	↑
4木	研究室(ゼミ室)訪問 第一期
5金	↓
6土	
7日	
8月	1年生幼稚園実習
9火	1年生幼稚園実習
10水	1年生幼稚園実習
11木	1年生幼稚園実習
12金	1年生幼稚園実習
13土	1年生幼稚園実習

日程	内 容
6/14日	
15月	↑
16火	
17水	研究室(ゼミ室)訪問 第二期
18木	
19金	
20土	▽ 希望用紙の提出期限 13:00(全員)
21日	
22月	ゼミ配属作業(担当&事務)
23火	教員：第1次配属の検討
24水	
25木	↑ 第1次決定者・未決定者の発表
26金	研究室(ゼミ室)訪問 第三期
27土	▽ 希望用紙の提出期限 13:00(未決定者)
28日	
29月	ゼミ配属作業(担当&事務)
30火	教員：第2次配属の検討
7/1水	
2木	第2次決定者・未決定者の発表
3金	
4土	
5日	
6月	未決定者の調整(担当&学生) 4:20pm~B43
7火	予備
8水	予備
9木	最終配属ゼミの発表
10金	
11土	
12日	
13月	
14火	

① 入学オリエンテーション

4月の入学当初におこなわれるオリエンテーションにおいて、学生は、ゼミナール活動の概要と配属決定までの経過について説明を受ける。

② 八王子オリエンテーション・セミナー

5月下旬に実施される2泊3日の「八王子オリエンテーション・セミナー」において、3つのゼミナールを体験する(プレゼミ)。学生は、掲示板の「プレゼミ概要」を見て3つまで希望する「プレゼミ」を申し込む。学生と教員の係は、「少なくとも必ず1つは希望したプレゼミを体験させる」といった配属方針でプレゼミの配属に当たる。

③ ゼミ説明会

6月初旬に学生を一同に集めて90分間の「ゼミ説明会」を開く。学生は、冊子「ゼミ案内」をもとに、ゼミナールの目的と配属の方法について説明を受けるとともに、各ゼミ担当教員から4分間の自分のゼミについての説明を受ける。冊子には、ゼミナールの目的と配属の方法及び日程、そして、各ゼミ担当教員が自ら書いた「教員の紹介」と「ゼミナール・シラバス」が載せられている。

④ 研究室訪問

研究室訪問の第一の目的は、個々のゼミナールについて冊子や説明で分からなかったことを直接にゼミ担当教員に尋ねることである。教員と話しているうちに自分の学びたいことが明らかになることもある。希望ゼミを固めること、これが研究室訪問の第二の目的である。また、教員の人柄や自分との相性についても理解することもできる。そして、自分をアピールするチャンスでもある。これらは、第3、第4の目的である。

ゼミナールの訪問期間は、間に幼稚園実習を挟んで10日間である。教員の学外での研修や学生の授業ということから、実質上、訪問できる機会は限られてしまう。

⑤ 配属ゼミの希望と決定

ゼミナール希望は、2回にわたっておこなうことを想定している。

研究室訪問終了後、第一回目の申し込みがおこなわれる。希望者が定員12名の場合、もしくは定員に満たない場合は、希望通り配属が決定される。希望者を定員を越えた場合には、ゼミ担当教員は、学生が書いた「ゼミ希望の理由」と研究室訪問時の状況などを参考に定員を決定する。今年度は、約4分の3が第一回目の希望で決定した。

第一回目の希望ゼミに配属されなかった学生は、定員に満たないゼミナールの掲示を参考に、1週間後に第二回目のゼミナール希望をする。同様にして、配属決定者を決める。さらに未決定者があった場合、配属担当教員の指導のもとに配属が調整され、最終的に全員が決定される。今年度の場合、第二回目のゼミナール希望で全員が確定した。

3、方法

1998年7月15日、1年生、194名に対してA4版にプリントした18項目からなる無記名自記式の質問紙調査用紙(資料3)を配布した。回収は、常設の「ゼミナールコーナー」に回収箱を設置し、提出してもらった。

主な調査項目は、①各ゼミナールについて理解するための情報源について5項目(ゼミ紹介冊子、ゼミ説明会、プレゼミなど)：「ゼミ希望の決定に当たって、次の項目はどの

くらい参考になりましたか」、②希望ゼミを決定する際の視点や「基準」について6項目(研究分野、教員の人柄、入りやすさなど)：「ゼミ希望の決定に当たって、次の項目はどのくらい重要視しましたか」、③その他、決定したゼミに対する満足状況やゼミ室訪問の問題点などについて7項目であった。有効回収率は、74%であった。

資料3 ゼミナール配属に関するアンケート

保育科カリキュラム係

1、第一回目のゼミ希望の決定に当たって、次の項目はどのくらい参考になりましたか。

冊子「ゼミナール案内」	①大いに参考になった	②参考になった	③少し参考になった	④参考にならなかった
ゼミ説明会	①大いに参考になった	②参考になった	③少し参考になった	④参考にならなかった
ゼミ室訪問	①大いに参考になった	②参考になった	③少し参考になった	④参考にならなかった
八王子でのプレゼミ	①大いに参考になった	②参考になった	③少し参考になった	④参考にならなかった
先輩のアドバイス	①大いに参考になった	②参考になった	③少し参考になった	④参考にならなかった
	⑤先輩からのアドバイスは受けなかった			

2、第一回目のゼミ希望の決定に当たって、次の項目はどのくらい重要視しましたか。

学びたい研究したい分野	①大いに重要視した	②重要視した	③少し重要視した	④重要視しなかった
将来の保育に役立つ分野	①大いに重要視した	②重要視した	③少し重要視した	④重要視しなかった
教員の人柄	①大いに重要視した	②重要視した	③少し重要視した	④重要視しなかった
友達と一緒にいること	①大いに重要視した	②重要視した	③少し重要視した	④重要視しなかった
活動が楽そうなゼミ	①大いに重要視した	②重要視した	③少し重要視した	④重要視しなかった
第一回で入りやすいゼミ	①大いに重要視した	②重要視した	③少し重要視した	④重要視しなかった

3、決定したゼミについてお聞きします。

プレゼミで体験しましたか	①体験した	②体験しなかった		
満足していますか	①大いに満足している	②満足している	③まあまあ満足している	④不満である

4、次の事柄についてお答え下さい。

ゼミ説明会(1つのゼミ説明が)	①長かった	②ちょうど良かった	③短かった
ゼミ訪問期間	①長かった	②ちょうど良かった	③短かった
訪問したゼミの先生から話	①長かった	②ちょうど良かった	③短かった
訪問したとき、自分からの話	①十分に話せた	②どちらとも言えない	③十分に話せなかった
訪問しようとした先生の不在	①不在が多かった	②どちらとも言えない	③不在ではなかった

***** ご協力ありがとうございました。より良いゼミ配属のための資料とさせていただきます。*****

4、結果と考察

1) 各ゼミナールについて理解するための情報源

ゼミ希望の決定に当たって参考になったのは、ゼミ室訪問での情報収集であった。「大いに参考になった」と58%が回答して、他の項目の30%台より高率である(図1)。

冊子「ゼミナール案内」やゼミ説明会、ゼミ室訪問は、「大いに参考になった」と「参考になった」を合わせると約9割になるのに対して、プレゼミは約7割である。希望ゼミの決定において、プレゼミでの経験は、他の機会と比べて参考にはなりにくい状況にある。

このこと背景として、開設される17ゼミのうち体験できるのは3つのプレゼミに過ぎないこと、入学後約1ヶ月半でのプレゼミ体験であること(ゼミナールについて問題意識

が低かったり、よく分からないままにプレゼミを選択したなど) が考えられる。

なお、先輩や情報収集先のゼミに所属する2年生からのアドバイスを受けていた学生は全体の約半分であった。そのうち「大いに参考になった」は30%程度で、全体として「参考になっている」とは言えない。現ゼミ生からゼミ情報は、学生側から見た「生の情報」で多角的、多面的に判断する上で重要である。2年生からの積極的なゼミ紹介が必要であろう。

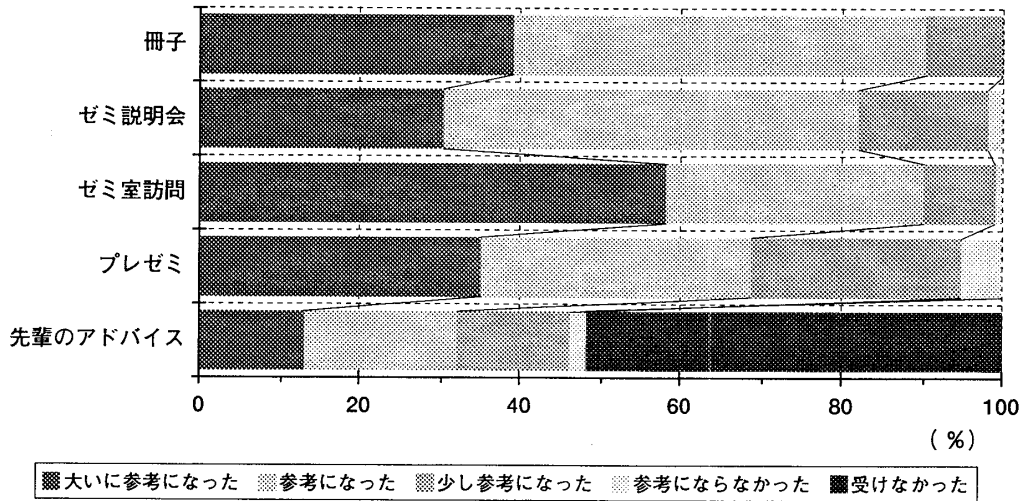


図1 ゼミ希望で参考にしたこと

2) 希望ゼミを決定する際の視点や「判断基準」

ゼミ希望の決定に当たって重要視した項目として、多かった順に「研究分野」87%、「教員の人柄（教員との相性）」85%、「保育に役立つ分野」72%であり、他の3項目を引き離れた（「大いに重視した」と「重視した」を加算、図2）。上位の2項目は、ゼミ配属担当者がゼミ説明会の際に、「決定に当たっての視点」として指導した項目である。

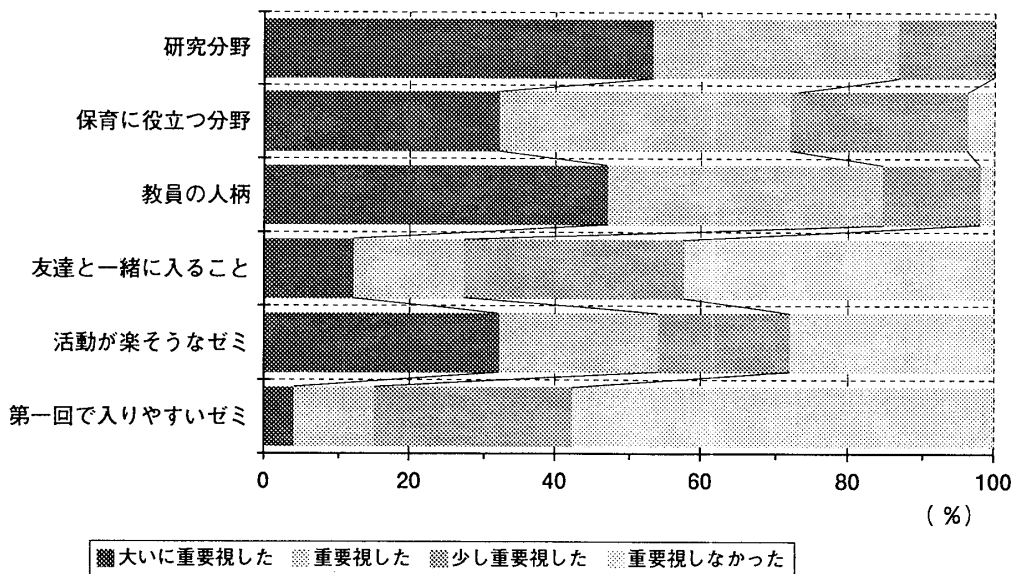


図2 ゼミ希望で重要視したこと

しかし、「活動が楽しそうなゼミ」に対して「大いに重視した」と3割の回答があったことは今後の課題としなければならない。次年度からのゼミナール説明において、その必要性や重要性、意義について強調する必要がある。

懸念していた「友達と一緒にいること」や「第一回で入りやすいゼミ」といった問題意識の低さに関わる視点や選択基準は、順に27%、15%と比較的低率であった。

全体としては、希望ゼミを決定する際の視点や「基準」は、比較的望ましいものであった。学生は、希望ゼミを決める際に、適切な視点や判断基準をもち、自らの意志にもとづいて、ゼミナールを判断、選択したものと推測される。

なお、第一回の希望調査で、「プレゼミで人気のあったゼミに希望が少ない」という傾向があった。このことの要因として、調査前には、「第一回で入りやすいゼミを選ぶ傾向がある」ではないかと考えた。しかし、今回の調査の結果から、その選択基準は、「大いに重視した」と「重視した」を合わせても15%に過ぎず、「第一回で入りやすい」という消極的で安易な判断基準ではなかったことが分かった。

3) 決定したゼミナールへの満足度

決定したゼミナールに対しての「大いに満足している」人の割合について、決定したゼミをプレゼミで体験していたかどうかでみた。「大いに満足している」と回答した割合は、体験していた人が52%であったのに対して、体験していなかった人は48%であった(図3)。やや「プレゼミを経験した人」の方が「大いに満足している」傾向がみられるが、統計学的に関連性はみられなかった($p=.138$)。なお、決定したゼミナールをプレゼミで経験していた割合は、44%と半数以下であった。

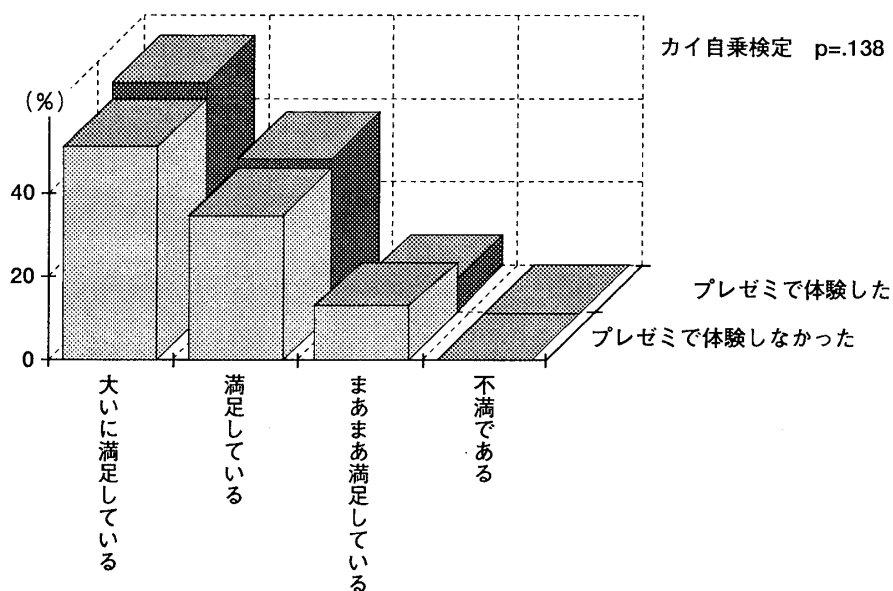


図3 プレゼミ体験別で見た満足度

4) 「希望通り」というプレゼミ配属の在り方

上記の満足度に関する2つ調査結果と、前に触れた「希望ゼミの決定に当たってのプレゼミの参考度」をもとに、プレゼミ配属の在り方について検討してみる。今年の今回の八

王子オリエンテーション・セミナーでは、「必ず1つは希望したプレゼミを体験させる」といった配属方針であった。そのために、大変な労力と時間を費やした。

しかし、学生がプレゼミを希望する時点において、「教員の研究分野や人柄について、あまり把握していない」ということが、学生へのインタビューなどで分かった。このことを裏付けるように、今回の調査では、「体験したプレゼミ」と、決定したゼミナールや希望したゼミナールとの間に明確な関連性は見られなかった。

つまり、プレゼミの希望を提出する時期においては、「希望」という意思を形成するための情報量が少なかった。そのために、自らの興味や関心にもとづく、確かな「希望」を示すことが困難であったのではないかと考えられる。プレゼミ配属の方針である「必ず希望したプレゼミを体験させる」といった方針について、再検討する必要があるものと思われる。

5) 情報収集のための期間

研究室訪問は、ゼミ希望の決定に当たって重要であるにも関わらず、半数近くの人が「短かった」と感じている（図4）。また、研究室を訪問した際に、全体の44%が「教員が不在であることが多かった」と回答している（図5）。このことも訪問期間の「短さ」に影響しているものと思われる。

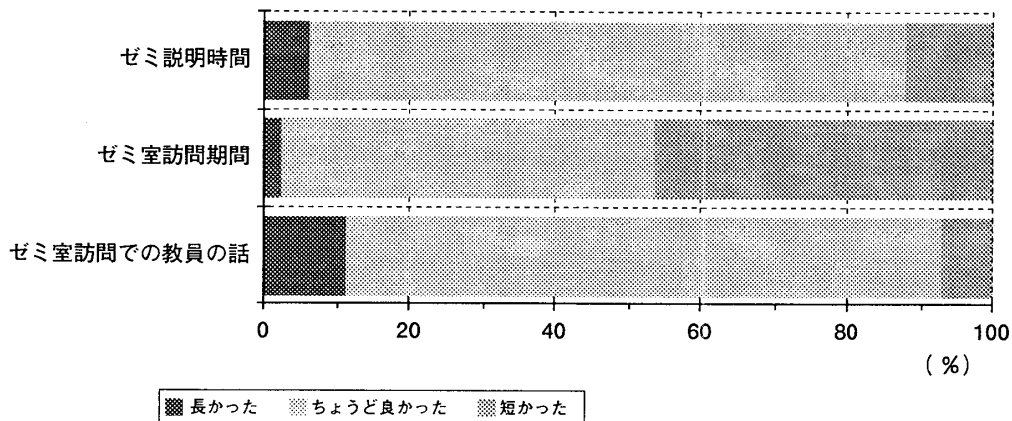


図4 資料収集などの期間の長さ

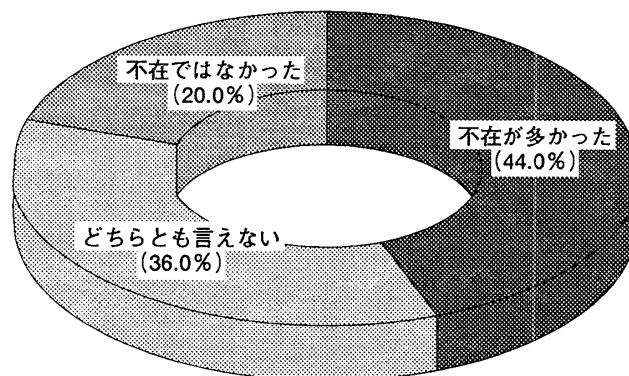


図5 訪問しようとしたときの先生の不在

全体としては、ゼミナールや教員についての情報が十分でないまま、希望ゼミを選んだことも考えられる。一方で、研究室訪問に積極的でない学生も見られた。どこを訪問するかで迷っていたことや研究室の「敷居の高さ」も考えられる。今後、教員からの積極的な呼びかけとともに、訪問期間を今年度より一週間程度は伸ばす必要があるものと思われる。

6) 研究室訪問時の会話

研究室を訪問したときに、自分の考えや先生に聞きたいことを「十分に話せなかった」と、4人に1人の割合で回答している(図6)。「自分の考えがまとまっていなかったのか」「時間が足りなかったのか」「一度に訪問した学生が多すぎたのか(教員が受け入れすぎたのか)」などの点について、検討する必要がある。

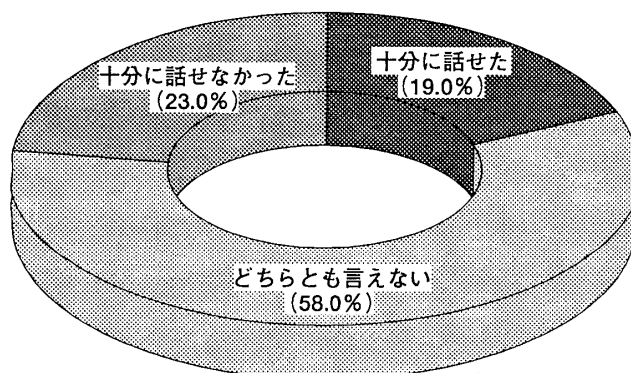


図6 訪問したとき、自分の話

5、おわりに

今回の調査から、以下の3点が明らかになった。

1) ゼミナール理解のための情報源として研究室訪問を参考にしている。

ゼミ希望の決定に当たって参考になったのは、研究室訪問での情報収集であった。冊子「ゼミナール案内」やゼミ説明会も重視する傾向にあるが、プレゼミでの経験は、希望ゼミの決定において、他の機会と比べて参考にはなりにくい状況であった。

2) 希望ゼミを決定する際に、研究分野と教員の人柄、及び保育実践に役立つ分野が重視される。

ゼミ希望の決定に当たって重要視したのは、ゼミ担当教員の研究分野と人柄、及び保育実践に役立つ分野であった。「活動が楽そうなゼミ」という安易な理由によるものが少なからずあったものの、全体としては、希望ゼミを決定する際の視点や「判断基準」は、比較的望ましいものであった。

3) オリエンテーション・セミナーにおけるプレゼミの配属において、「希望通り」という方針は、「非常に」有効であるとはいえない。

プレゼミの希望を提出する時期においては、「希望」という意思を形成するための情報量

が少ないために、自らの興味や関心にもとづく、確かな「希望」を示すことは困難である。従って、プレゼミ配属の方針である「必ず希望したプレゼミを体験させる」といった方針は、再考する必要がある。

以上のことから、今後、「十分なゼミ訪問期間をいかに確保するか」、「各ゼミナールについて教員と学生が直接話す機会をいかに設けるか」（ゼミ教員の不在問題の解決も含む）が、検討課題となる。

むらた つとむ（健康教育学）